



## 第三回 長篠城

### ～長篠城籠城戦と設楽原の決戦～

今回紹介するのは、「長篠の戦」の現場、長篠城です。長篠の戦といえば、織田信長が三千挺もの鉄砲による三段打ちという新戦術によって、当時最強と言われた武田の騎馬軍団を壊滅させた戦いということでつとに有名ですが、織田軍が馬防柵を作り、武田軍を鉄砲で迎え撃った場所は、設楽原という丘陵地帯で、長篠城から3kmほど西側になります。また、鉄砲の三段撃ちなどは後世の創作で、実際にはそんな戦術は使われなかったとの説もあります。以下に、長篠の戦の概要を紹介しましょう。

#### 当時の情勢

足利義昭の策謀による信長包囲網が形成される中、大軍を率いて三河へ侵攻して来た武田信玄に徳川家康は三方ヶ原の戦いで大敗します。しかし、その直後に信玄が急死。武田軍は引き上げました。それからしばらく大きな戦はありませんでしたが、三年の後、信玄の跡を継いだ武田勝頼は、三河・遠江方面への侵攻を開始します。武田軍は三河北部の諸城を落とし、次いで遠江の要衝、高天神城を囲みました。対する家康は信長の援軍を待って積極的に動かず、その間に高天神城を奪われてしまいました。そして翌年、武田勝頼は徳川方へ寝返っていた長篠城を奪い返すべく軍勢を率いて甲府を出陣しました。

#### 長篠城の籠城戦

長篠城は、豊川と宇連川の合流点の断崖絶壁を2方に利用し、北方には堀と土塁を築いた堅固な城でしたが、押寄せる武田軍1万余に対して長篠城の守備兵はわずか5百。城主の奥平貞昌は防備を固くして猛攻に耐えます

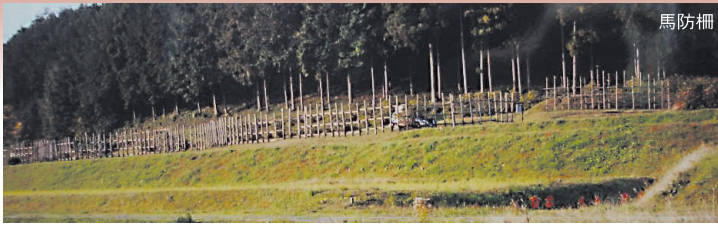
が、外郭を落とされ、ついに兵糧もあと4、5日分を残すのみとなりました。この時、鳥居強右衛門という男が救援を求める密使に志願しました。未明に密かに断崖を川へ降りた強右衛門は、数km下流で上陸し脱出成功の烽火を上げると、岡崎城へ走りました。そこで援軍に来ていた信長に城中の様子を伝えて救援を請い、信長もこれに応じました。彼はこの信長の言葉を伝えるために戦場へ戻りますが、城を目前にして武田軍に捕らえられてしまいます。武田軍は強右衛門に城へ援軍は来ないと言わせようとしますが、彼は「援軍は来る！」と叫んだため、対岸に磔にされて絶命しました。しかし、このことは城兵を大いに勇気付け、長篠城は援軍到着まで持ちこたえたのでした。

#### 設楽原の戦い

長篠城の窮状を知った織田・徳川連合軍は、長篠城西方の設楽原まで軍勢を前進させると、南北に流れる連吾川の手前に土塁、壕、木柵を何重にも築いて布陣



設楽原の戦いにおける両軍配置図



馬防柵

します。その数3万余。武田軍のおよそ3倍でした。武田軍では軍議が行われますが、退却論が退けられて主戦論に決します。ここでなぜ主戦論が押し切ったのか、諸説あって真相は不明ですが、いずれにしろ武田軍は主力を移動させて織田・徳川連合軍に対する形で布陣しました。そして、朝霧の立ち込める中、戦闘が開始されました。この頃、織田・徳川連合軍の別働隊が長篠城南のとびのす鷹巣山等に陣取る武田の攻囲軍を強襲、激戦の末これらを破って長篠城の守備隊と合流し、攻囲軍を攻め立てました。後背を脅かされる形となった設楽原の武田軍は総攻撃を仕掛けますが、その激しい波状攻撃に対して織田・徳川連合軍は土塁や木柵の後ろから鉄砲で応戦。武田軍はばたばたと撃ち倒され、信玄以来の有力な家臣達が次々に討ち死にしていきます。そして満を持して出撃した連合軍に散々に追い討ちをかけられ、勝頼はわずかな供回りと共に落ちていったのでした。

### 鉄砲の三段撃ちはなかったのか？

さて、上記の説明では、武田騎馬軍団の突撃も、鉄砲の三段撃ちも、あえて書きませんでした。なぜなら、近年これらの定説は全くの虚構であるとの説が声高に唱えられているからです。

鉄砲の三段撃ちは、江戸時代に書かれた「ほあん甫庵しんちようき信長記」にはじめて登場するもので、当時の記録として信頼性が高いとされる「しんちようき信長公記」や「みかわものがたり三河物語」等には、このような戦術について一切記載されていないといます。そして、鉄砲の数も三千挺ではなく、信長配下の部将からかき集めてきた千挺ちょっと程度だったようです。そのような寄せ集めの鉄砲兵があのような狭い場所で前後に交代しながら次々に鉄砲を撃つような複雑な運動ができたのか？断続的に攻撃してくる敵に対して全戦線にわたり一斉に鉄砲を撃つ必要があるのか？など、合理的な観点からの疑問も尽きません。

また、騎馬武者が一斉に突撃するような騎馬軍団は当時存在しなかったといます。馬体の小さな日本馬はもっぱら移動手段として使われ、追撃戦の場合などは騎乗したようですが、当時の宣教師が書き残しているように、いざ戦という時には馬を降りて戦うのが通常だったという

のです。そして、上記の「信長公記」等の史料にも騎馬武者が突撃したという記載はないということです。

この戦いで鉄砲が効果的に使われたのは確かなようですが、勝敗を決めた主な要因は鉄砲による新戦術などではなかったというのが前記の説による見方です。後背を脅かされた武田軍は、事態を打開するために正面の敵陣地に対して無理な攻撃を仕掛けざるを得なくなり、その結果、野戦でありながらあたかも攻城戦のような戦いを強いられました。一般に攻城戦では、攻撃側は守備側に数倍する兵力が必要だと言われます。武田軍の兵力は逆に数分の一。あのような大敗を喫することは当然であったというのです。

### 現在の長篠城と設楽原

現在の長篠城址は、脇をJR飯田線が走り（長篠城駅がある）、川には鉄橋が渡されていますが、断崖絶壁は当時のままであり、一部ですが北側の土塁や空堀も残っています。そして城内には「長篠城址史跡保存館」があって、英雄・鳥居強右衛門の錦絵や血染めの陣太鼓などが展示されています。一方、設楽原には織田・徳川連合軍の馬防柵や土塁が再現されています。そして、武田軍が駆け下ったと考えられる丘の上には「設楽原歴史資料館」があり、鉄砲を中心とした歴史資料が展示されています。

この辺りに足を運ぶことは少ないと思いますが、なかなか見ごたえのある歴史スポットですので、機会があれば是非訪ねてみて下さい。



長篠城址